

ジャガイモ

アイマサリ（青果・加工業務用）

—大玉で多収の病虫害に強い暖地二期作向け新品種—

長崎県農林技術開発センター 馬鈴薯研究室 主任研究員

さかもと
坂本

ゆう
悠

1 はじめに

長崎県で栽培されているバレイショの主要品種は「ニシユタカ」、「デジマ」および「メイクイン」で、この3品種で栽培面積の約85%を占めている。しかし、いずれの品種もジャガイモシストセンチュウやジャガイモYウイルスに対する抵抗性がないため、生産現場ではこれらの病虫害による減収や品質低下が問題となっている。また、消費者の「食の安全・安心」に対する関心の高まりから、減農薬栽培が可能な品種の開発が望まれている。そこで、大玉で多収かつジャガイモシストセンチュウおよびジャガイモYウイルス抵抗性の暖地二期作向けバレイショ新品種「アイマサリ」を

育成したので紹介する。

2 来歴および育成経過

「アイマサリ（旧系統名：西海40号）」は、大玉、多収で複合病虫害抵抗性を有する品種育成を目的とし、長崎県農林技術開発センターにおいて育成を進めてきた品種である。ジャガイモシストセンチュウおよびジャガイモYウイルスに抵抗性で、青枯病に強い「愛系158」を母、ジャガイモシストセンチュウおよびジャガイモXウイルスに抵抗性で、大玉、多収で外観が良い「アイユタカ」を父として平成19年に交配し、翌20年に播種した（図1）。

平成21年には系統選抜試験に供試し、病



図1 「アイマサリ」の系譜

虫害抵抗性系統を効率的に選抜するためDNA マーカー選抜を行った。平成22年より生産力検定試験に供試し、栽培特性や加工特性等の評価を行い、平成29年6月に品種登録出願し、同年9月に公表された。

3 特性の概要

(1) 栽培特性

出芽期は春作・秋作ともに「ニシユタカ」より早く、草姿は直立性、熟性は中晩生である（写真1）。

茎長は春作・秋作ともに「ニシユタカ」よりやや長く、茎数は「ニシユタカ」よりやや多い。春作・秋作ともに、上いも平均重は「ニシユタカ」より大きく、上いも数は「ニシユタカ」並みで、上いも重は「ニシユタカ」より多い。また、上いも平均重および上いも重の増加が早い（図2）。二次生長は少ないが、秋作で裂開が発生する



写真1 「アイマサリ」の地上部

ことがある。でん粉価は春作・秋作ともに「ニシユタカ」と同等である（表1）。

(2) 品質および加工特性

目は浅く、表皮は滑らかで外観が良い（写真2）。休眠期間は「ニシユタカ」より短い。肉質は中～やや粘質で、蒸しいものの食味は良い。加工メーカーによるテストでは、滑らかな食感と色合いがポテトサラダに適す

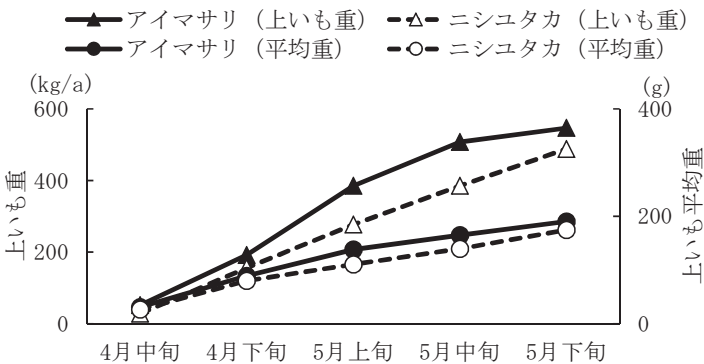


図2 上いも重および平均重の推移
※ H24-28の平均

表1 「アイマサリ」の栽培特性（長崎県農林技術開発センター H22-28）

作型	品種名	出芽期 (月日)	草姿	茎長 (cm)	茎数 (本/株)	熟性	上いも 数 (個/株)	上いも 平均重 (g)	上いも重 (kg/a)	標準 比 (%)	二次 生長 (%)	裂開 (%)	でん 粉価 (%)
春作 マルチ	アイマサリ	3.16	やや直立	44	2.1	中晩生	4.8	133	406	107	0.6	0.7	11.4
	ニシユタカ	3.21	やや直立	41	1.6	中晩生	4.8	125	379	100	1.0	0.5	10.9
秋作 普通	アイマサリ	9.28	やや直立	48	2.5	中晩生	4.0	137	354	132	0.0	2.7	9.4
	ニシユタカ	10.04	やや直立	45	2.2	中晩生	3.7	109	268	100	0.3	1.1	9.6

表2 「アイマサリ」の品質特性、病害虫抵抗性

品種名	塊茎				休眠期間		調理特性		サラダ加工		病害虫抵抗性				
	形	目の深さ	皮色	肉色	春作後 (日)	秋作後 (日)	肉質	調理後の 黒変	肉質	適性	ジャガイモ シスト センチュウ	ジャガイモ Yウイルス	青枯 病	疫病	そう か病
アイマ サリ	短卵形 ～円形	浅	淡ペー ジュ	明黄 ～淡黄	71 (65)	97 (54)	中～ やや粘	微～ 無	滑	中	抵抗性	抵抗性	やや 弱	やや弱 ～弱	やや 弱
ニシユ タカ	短卵形 ～円形	やや 浅	淡ペー ジュ	淡黄	97 (99)	103 (68)	やや粘 ～中	微～ 無	－	－	感受性	感受性	中	やや弱 ～弱	弱

※サラダ加工についてはサラダメーカーによる適性試験で、九州産トヨシロ比

※休眠期間については常温貯蔵による休眠日数およびカッポ内に22℃定温貯蔵による休眠日数を示した

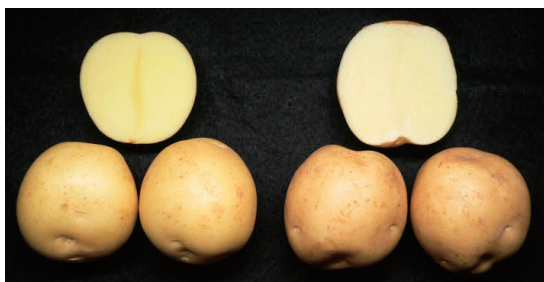


写真2 「アイマサリ」の塊茎
(左：アイマサリ、右：ニシユタカ)

ると評価されている（表2）。

(3) 病害虫抵抗性

ジャガイモシストセンチュウおよびジャガイモYウイルスに抵抗性で、青枯病およびジャガイモそうか病抵抗性は“やや弱”、疫病抵抗性は“やや弱～弱”である（表2）。

4 適地および栽培上の留意点

適地は、西南暖地のばれいしょ栽培地帯である。多収性や早期収穫適性、病虫害抵抗性を活かした減農薬栽培と所得向上が期待できる。

一方、栽培上の留意点としては、春作マルチ栽培において、収穫が遅れると腐敗が発生しやすく、また、表皮が粗くなることがあるので適期に収穫する必要がある。また、青枯病には弱いため、本病が発生しやすい圃場での栽培は避ける。

5 普及に向けて

これまでの栽培試験をもとに現場での試作を行っており、栽培技術をまとめたマニュアルを作成して、品種特性とともに周知し、普及を推進していきたい。

一方、本県のパレイショの出荷時期は、トンネル栽培が減少し、5～6月が主体となっている。本県では、価格の安定化や5月中下旬に集中する収穫時の労力分散のため、4月の出荷割合を高めるための施策を展開している。「アイマサリ」は「ニシユタカ」に比べ萌芽期が早く、早期収穫適性があることから、「アイマサリ」の安定的な4月出荷を可能とする栽培技術の確立を目指している。「アイマサリ」に対する本県の生産者などの関心は高く、当面は県内での普及を図る。

「アイマサリ」の育成者

坂本悠、松尾祐輝、龍美沙紀、森一幸、中尾敬、向島信洋、田宮誠司、渡邊亘、草原典夫、茶谷正孝